

## 身体部位による韓日兩國のことわざの意味素の比較研究

盧 顯 松・曹 喜 澈

日語日文学科

(1985. 4. 30 접수)

### 〈要 約〉

ことわざとは、民衆の経験・知恵・教訓から生み出された真理を簡潔かつ分かり易く表現した隠喩的慣用語であり、どの民族においても、その発生時期や作者のはっきりしない自然発生の社会的産物である。

また、このようなことわざは、異質文化との交流によってより一層発達するものであるが、長い間、同じ漢文化圏の中で息づいて来た韓日兩國は、これまでの文化的連帯関係に照らして、ことわざの発達においてもお互いに大きな影響を及ぼし合ったものと考えられる。

本稿は、このような視点から韓日兩國のことわざの比較研究を試みた。中でも、特に身体部位を構成要素としているものを中心に意味論的な面からその意味素を比較・分析・考察し、兩國のことわざの相互影響と兩國民の言語意識をも考究してみた。

## 身体部位에 의한 韓日兩國 俗談의 意味素 比較研究

盧 顯 松・曹 喜 澈

日語日文学科

(1985. 4. 30 접수)

### 〈要 約〉

俗談이란, 民衆의 經驗・智慧・教訓에서 우려난 眞理를 簡潔하고 平凡하게 表現한 隱喩的 慣用語로서, 어느 民族에 있어서나 發生過程面에서 보면, 發生時期나 作者를 알 수 없는 自然發生的인 社會的 産物이다. 그러나 이러한 俗談도 異質文化와의 文化的 交流에 의하여 더욱 發達되는데, 오랫동안 漢文化圈 안에서 같이 呼吸해 온 韓・日兩國은 그 間의 文化的 紐帶關係로 비추어 보아, 俗談의 發達에도 큰 相互 影響을 미쳤을 것으로 생각된다.

本稿는 이와 같은 觀點에서 韓・日兩國의 俗談을 比較研究해 보려고 試圖하였다. 兩國의 俗談 中에서도 특히 身體部位를 構成要素로 하여 이루어진 俗談을 中心으로 意味論的인 觀點에서 意味素를 比較・分析考察하여, 兩國 속담이 相互間에 미친 影響과 兩國民族의 言語意識을 究明해 보았다.

### I.はじめに

ことわざとは、民衆の経験と知恵、教訓から生み出された真理を簡潔かつ分かり易く表現した隠喩的慣用語であると言える。ことわざの発生は、どの民族においても遠い昔のことであり、発生過程面から見れば民謡などと同様、発生時期や作者のわからない自然発生的な社会的産物である。したがって一國のことわざは、その先祖から受け継がれた教訓的・知識的・道徳的遺産であり、民衆の中から生まれ、育たれ、陶冶された民衆の経験なり、知識なり、かつ文化財なのである。

また、ことわざは異質文化との交流によってより一層発達する。韓國のことわざの場合も、古くから漢文化

圏に属し、中国の古典文献を通じて中国のことわざが豊富に紹介されてからより豊かなものとなった。中国のことわざは韓国固有のものではないのだから除外しなければならないという意見もあり得るが、中国のものだとしても一応、韓国に入って来て呼吸を共にし、韓国人の生活に解け込んですでに国訛化したものを、今さらのように除外する必要はないと思う。

このような面において日本も例外ではない。同じ漢文化圏の中で息づき、古来から韓国とは陰に陽に緊密な関係を保って来た。そのため両国ともそれなりの歴史・文化を築きつつ、相当な影響を及ぼし合ったものと考えられる。ことわざにおいても例外ではない。したがって韓日両国のことわざの比較・研究は、それ自体、一面の価値をもち、両民族の言語意識を再照明し、再認識するのに大いに役立つに違いない。

ことわざに関する研究・分析にはいろいろな方法、観点、方向があり得るが、大きく分けて修辭学的研究、文法的研究、意味論的研究の三つに分けられる。本稿では、特に身体部位を構成要素としていることわざを中心に意味論的な立場から韓日両国のことわざの構成意味素と言外意味素を比較・分析考察し、両国民族の言語意識を探って見ることにする。

本研究の資料としては、韓国のことわざの場合は李基文編「俗談辭典」、日本の場合は鈴木榮三・広田榮太郎編「故事ことわざ辞典」を中心として取り上げた。<sup>(1)</sup>

## Ⅱ. ことわざの意味単位

本稿で取り扱うことわざの意味素的分析のためにことわざの一般的な性質とことわざの構成要素である意味単位について少し触れてみる。ことわざの特性はその慣用性にあるので、もともと慣用的な性質をもつ意味生産の重要な一手段とされており、なお、その表現方法は、意味論と文法論の研究の好対象とされている。なぜならば慣用構造は正規の文法構造より民衆の言語生活に、より親しまれ、愛用されてきており、その意味範囲も広いからである。このようなことわざの慣用性に基づく意味論的立場から、ことわざは構成意味素と言外意味素に二分することができる。

### 1. ことわざの構成意味素

ことわざは慣用的に二つ以上の単語が組み合わせられて、または相応して用いられ、その結合が全体的なある一つの決まった意味を生み出す、独特の表現方法による一つの意味単位としての語形を成している。即ち、ある一つの意味単位をつくるのに必要な各々の語素がそのことわざの構成意味素である。言い替えば、一つ一つの構成意味素の結合によりことわざが成り立つのである。

例をあげれば、

- 말 없는 말이 천리 간다.
- 먼 는 도끼 에 말 들 찍 힌다.
- 瓜 に 火 を と も す
- 親 の 目 は ひ い き 目

から見られるように、下線部分の各々の語素がことわざの構成意味素になるわけである。しかし、どんな構成意味素でも組み合わせさえすればことわざとしての意味を成すのではなく、ことわざは特定構成意味素の慣用的な結合によってのみ意味を持つようになっている。例えば、上記のことわざの語素をとりかえて「말 없는 말이 천리 온다」または、「星 に 火 を と も す」「瓜 に 火 を と も さ ず」のように文法的には何ら問題のない一つの文が成立したとしても、これはことわざとしての意味を成せないのである。その理由は、語素の結合が慣用的でないからである。したがって語素の結合だけでことわざになり得ない理由は、文法的に不適合であるからという外部的な制限でなく、慣用性によってのみ成立できるようになっている意味の結

(1) 李基文編, 俗談辭典, 一潮閣, 1982.  
鈴木榮三・広田榮太郎編, 故事ことわざ辞典, 東京堂出版, 1979.

合のためである。

以上のように、ことわざの構成要素となる語素は必ずしもその語素の結合でなければならない、慣用性に基づく独特な表現構造から成っている。

2. ことわざの言外意味素

ことわざは統辞的性格を有し、統辞的結合をするので、その構成要素の意味を把握するだけではそのことわざの真の意味がはっきり理解できない特異な構造から成っている。ここでの特異な構造とは、先に述べたようにことわざの構成要素である語素は必ずその語素の結合のみにより成立する慣用的な制限のある表現構造を意味する。即ち、慣用性のある特定構成意味素から成ることわざは、これらの構成意味素の意味に拘らない新たな一つの意味素を生成するようになるが、これが所謂、言外意味素である。

例えば、「말 없는 말이 칠리 잔다」「爪に火をともす」ということわざは、「말, 없는, 말, 이, 칠리, 잔다」「爪, に, 火, を, ともす」の各構成要素、つまり構成意味素の結合から成っているのに、ことわざ全体の意味は、本来の構成意味素の持つ意味とは全く違う新しい語素、つまり「謹慎」「吝嗇」という意味素を生み出すのである。これが「말 없는 말이 칠리 잔다」「爪に火をともす」ということわざの言外意味素である。

これを分り易く図に表して見れば次のようになる。

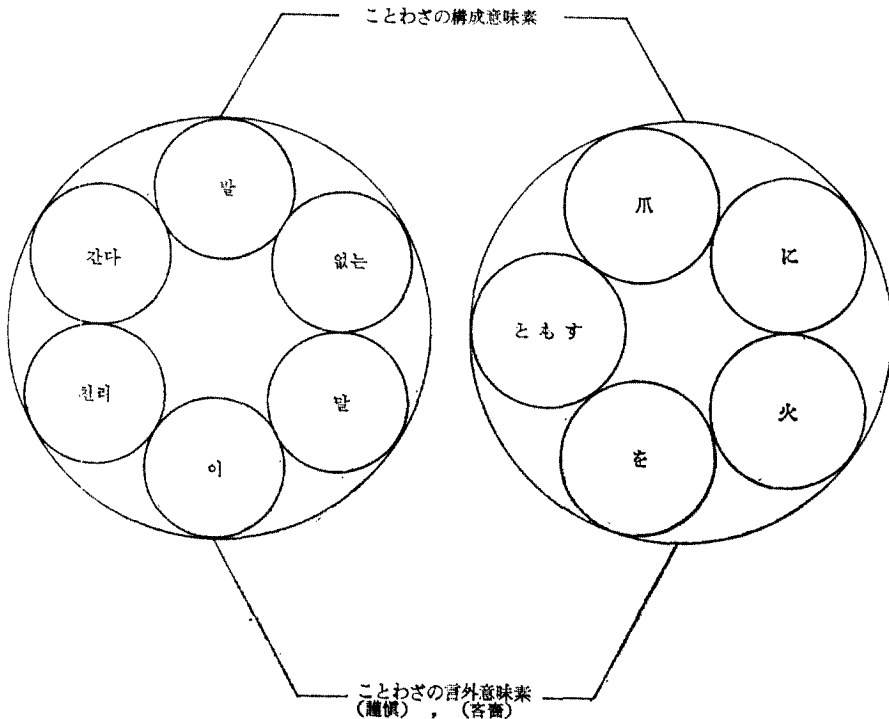


図 1. 構成意味素と言外意味素

図1のようにことわざは個々の意味素から構成されているが、その本来の意味とは全く違う、一つの新たな意味単位としての意味素を作り出すのである。したがってことわざは、形態的には複数の意味を持ちながら統辞的性質を帯び、意味的には新たな一つの言外意味素を作り出していると言える。従って、ことわざの意味単位は日常語の意味単位と同じなのである。

### Ⅲ. 身体部位によることわざの構成意味素

ことわざが自然発生的なものであるだけに構成意味素の選定また自然な言語心理の発現によるものである。洋の東西を問わず、各国のことわざの意味素は種類も多く、数量においても相当なものである。そのうち頻出度の高い語素抽出により、各民族の好きな語素とか言語生活上の関心分野などの言語意識がうかがわれる。ことわざは自然発生のものであるため、どの国であれその語素は実生活と関係の深いものを用いてことわざの構成意味素としている。一般的に用いられる構成意味素の種類は名詞類が一番多い。どの言語であれ、品詞の中で一番比率の高いものが名詞であることから考えて、ことわざの構成意味素の中で、名詞の数が最も多いのは当然の結果であろう。さらに文明の発達しない原始状態の生活を営んでいた時代における人間の言語は、おのずから実生活と関係の深い身近なものや人間の身体に関するものであつたらう。これは、ことわざの発生時期が古く、まだ社会の未分化していた時であることから考えて見れば納得のできることである。

本稿では、ことわざの構成要素の中、特に身体部位に関するものを中心として韓日両国語のことわざの意味素の比較を試みた。この章では韓国と日本のことわざの身体部位から成る構成意味素を比較・考察し、両民族の語彙選択による言語意識を調べてみるつもりである。<sup>(2)</sup>とりあえず韓国語のことわざと日本語のことわざに分けて考察して見ることにする。

#### 1. 韓国のことわざの構成意味素

韓国のことわざの中で身体部位を構成意味素とすることわざの総数は、ことわざ総7200余の中、約590にのぼる。これを身体部位別の構成意味素の使用頻出度順にまとめてみると、次のようである。<sup>(3)</sup>

〈表1〉 韓国のことわざの中の身体部位による構成意味素の種類と頻出度

順序	構成意味素	頻出度	ことわざの例
1	눈(目)	72	눈 잠으면 코 베어 먹을 세상
2	입・아가리(口)	47	입은 비풀어졌어도 주라는 바로 불어라
3	코(鼻)	44	내 코가 석자
4	발(足)	37	발 없는 말이 천리 간다
5	손(手)	31	손에 붙은 밥풀 아니먹을까
6	귀(耳)	31	귀장사하지 말고 눈장사하라
7	배(腹)	29	내 배부르면 중에게 밥짓지 말라고 한다
8	이(齒)	23	이가 없으면 잇몸으로 살지
9	머리・대가리(頭)	23	머리를 삼으면 귀까지 익는다
10	낯・얼굴(顔)	19	웃는 낯에 짐 벨으랴
11	다리(脚)	19	다리 부러진 장수 성 안에서 호령한다
12	신체내부 <sup>(4)</sup> (身体内部)	17	간에 가 붙고, 쓸개에 가 붙는다
13	뺨(頬)	16	빳 주고 뺨 맞는다
14	등(背)	15	등 마시던 배 부르다
15	목(首)	12	비는 장수 목 벨 수 없다
16	발등(足の甲)	12	밧는 도끼에 발등 찍힌다
17	수염・털(毛)	11	수염이 석자라도 먹어야 산다

(2) 兩國の身体部位に関することわざの中、排泄器官と排泄物によることわざは数わないことにした。

(3) この数値は李基文編「俗談辞典」を中心とし、その他多数の俗談集を資料にし、総7,200余個のことわざの中から抜粋したもので、絶対的でない相対的な数値であることを明らかにしておく。もっと多くの資料を集めれば数値は多くなるだろうがことわざ総数の中の身体部位になることわざの占める比率は大同小異であろうと思われる。

(4) 腸、肝、腎、胆、肺などはまとめて身体内部とした。

順序	構成意味素	頻出度	ことわざの例
18	혀(舌)	11	혀 아래 도끼 들었다
19	이마(額)	9	이마에 내친자불 그린다
20	엉덩이・불기(尻)	8	엉덩이에 뿔이 났다
21	손가락(指)	8	열손가락에 어느 손가락 깨물어 아프지 않을까
22	손톱(爪)	7	내 손톱에 장을 지저라
23	목구멍(喉)	7	목구멍이 포도청
24	상투(鬚)	6	상투가 국수버섯 솟듯 하였다
25	눈썹(眉)	6	눈썹에 불 붙는다
26	가슴(胸)	6	미련한 놈 가슴에 고드름 안 녹는다
27	주먹(拳)	6	주먹은 가잡고 범은 멀다
28	살(肌)	6	쇠가 쇠를 먹고 살이 살을 먹는다
29	허리(腰)	6	허리에 돈 차고 학 타고 양주에 올라갈까
30	배꼽(臍)	5	배꼽에 老松나무 나거든
31	팔(腕)	5	팔이 들이 굽지 내 굽나
32	어깨(肩)	5	한 어깨에 두 지계를 질까
33	몸(身)	5	내 몸이 높아지면 아래를 살펴야한다
34	뼈(骨)	4	늪 덕에 잔 뼈가 굼었느냐
35	머리카락(髮)	4	머리카락 위에서 숯바꼭질 한다
36	젖(乳)	3	젖 먹던 힘이 다 든다
37	입술(唇)	3	입술이 없으면 이가 시리다
38	발톱(足指の爪)	3	첫가을에는 손톱, 발톱도 다 먹는다
39	턱(顎)	3	턱 떨어진 광대
40	정강이(脛)	2	정강이가 받아들보다 낫다
41	발가락(足指)	2	발가락의 티눈만큼도 안 여진다
42	무릎(膝)	1	남이 장에 간다하니 무릎에 당진 씌다

上の表1から見られるように、韓国のことわざで身体部位を表す構成意味素を頻出度から見た時は、目、口、鼻、足、手、耳、腹、齒…などの順になっている。人間が外界の刺激を感じ取る一番本能的な感覚である。いわゆる五感を感知する身体部位である。これは、人間生活に最も身近な部分そのまま言語生活にも表われていることを示してくれる。この中でも特に「目」が多いのは、韓国人が人間の五感の中で、「視覚」に最も重きを置いているとこうことを表わすものである。

ところで、上の表にもあるように、身体部位を用いたことわざの中、一つのことわざに身体部位による構成意味素が二つずつ出てくるものも多数ある。<sup>(5)</sup>一つのことわざに身体部位から成る構成意味素が一つ入っているものもさることながら、二つも使われるというのは、身体部位と人間生活がどれだけ深い関わりをもって結ばれているかを物語ってくれるものと言えるだろう。

## 2. 日本のことわざの構成意味素

日本のことわざから身体部位を構成意味素として用いたことわざの総数を調べてみた結果、総11,000余のうち、約870個に及んだ。これを身体部位別の構成意味素の使用頻出度順にまとめてみると次のようである。<sup>(6)</sup>

(5) 韓国のことわざの場合、身体部位の出ることわざ590余りのうち、身体部位による構成意味素が二つあることわざが50余りあった。

(6) この数値は鈴木業三・広田栄太郎編「故事ことわざ辞典」を中心とし、その他、多数のことわざ辞典を資料として、ことわざ総数11,000余のうち、抜粋したものであるので韓国のことわざと同様、相対的な数値であることを明らかにしておく。

〈表2〉 日本のことわざの中の身体部位による構成意味素の種類と頻出度

順序	構成意味素	頻出度	ことわざの例
1	手	137	手も足もつけられない。
2	目	85	目も口程に物を言う
3	口	82	口では大阪の城も立つ
4	身	72	身を百に分けて稼ぐ
5	足	53	銭は足なくして走る。
6	腹	50	腹も身の中
7	耳	41	破れ頭巾で耳にかかる。
8	鼻	33	花の下より鼻の下
9	尻	30	尻に目薬
10	顔	27	向う顔に矢立たず
11	頭	26	恥と頭はかき次第
12	歯	16	歯に衣着せぬ
13	首	16	真綿で首をしめる。
14	舌	16	三寸の舌を掉う
15	爪	16	爪に火をともし
16	毛	15	毛は氣につれる
17	身体内部 <sup>(7)</sup>	13	肝も興も醒める
18	脛	12	脛から火を出す
19	背	11	背に腹は代えられぬ
20	眉	11	眉につばをつける
21	指	10	月を指せば指を認む
22	骨	10	骨折り損のくたびれ儲け
23	頬	8	一口物に頬を焼く
24	腕	8	のれんに腕押し
25	腰	8	下り坂に腰を押す
26	臍	7	臍をかむ
27	肩	7	肩を裾へ結ぶ
28	膝	7	膝とも談合
29	拳	6	握り拳の素戻り
30	顎	6	顎食い違ふ
31	髪	6	志は髪の筋
32	喉	5	喉から手が出る
33	額	5	額には筋は立つとも背は立てじ
34	胸	4	胸に釘打つ
35	乳	3	泣く子に乳
36	股	3	負けずもうの小股取る如し
37	唇	2	唇被びて歯寒し
38	肘	2	ひじの指を使うが如し
39	胴	2	胴より胆が張る
40	肌	1	従兄弟の肌は温い
41	脇	1	脇を搔く

表2から見るように日本のことわざでは身体部位を表す構成意味素が、その頻出度から見た時、「手、目、口

(7) 肝, 胆, 脳などを身体内部としてまとめた。

身、足、腹、耳、鼻…」などの順になっている。日本のことわざの場合も韓国のことわざと同様、基本的かつ本能的な感覚である五感を感じる身体部位によるものが最も多かった。これによって日本人もやはり、人間生活に一番身近なものを言語生活に反映させていることがわかる。日本のことわざのうち、身体部位を用いたものの中で頻出度の最も高いのは「手」である。「手」は五感のうちの「触覚」の感知ばかりでなく、人間の動作においても欠かすことのできない部位である。つまり、これは実用的な面に重きを置いたことになる。韓国のことわざの中では「目」がトップを占めたのと比べると相当のずれがあると言える。

また、韓国のことわざと同様、一つのことわざの中に身体部位を表わす構成意味素が二つ以上含まれているものもかなりある。<sup>(8)</sup>

### 3. 両国のことわざの構成意味素の比較

表1、表2を中心として韓日両国の身体部位から成ることわざの構成意味素を比較して見ると、次のようになる。

まず、両国のことわざの中の身体部位を構成要素としていることわざの比率を比べて見た場合、韓国のことわざ7,200余個のうち約590個、日本のことわざ11,000余個のうち約870個という数値が出された。調査したことわざの総数は日本の方が遙かに多いが、このうち身体部位を構成意味素としているものの割合をパーセンテージにして表わせれば、韓国はことわざ総数の8.2パーセント、日本はことわざ総数の約7.9パーセントで、両国は、ほぼ同率を示す。

いっぽう、身体部位を表わす構成意味素の種類においても韓国の方が42種、日本の方が41種でほぼ同じである。また、その内容において多少の差はあるものの大差のないことがわかる。<sup>(9)</sup>ただその多少の差のある理由としては、韓国のことわざは 발(足首から先の部分)と 다리(足首から股までの部分), 손톱(手指の爪)と 발톱(足指の爪)などに区別されているのに反して、日本のことわざはこのような区別無しに足、爪として使っているので、このような身体部位の分け方の違いから来ていると考えることができる。

また、ことわざの中で身体部位を表わす構成要素の中、どれが一番多いかという頻出度を比べてみた場合、韓国のことわざは「目、口、鼻、足、手、耳、腹、歯…」の順で、目が最も多く、日本のことわざは「手、目、口、身、足、腹、耳、鼻…」の順で「手」が最も多いということが言えた。一位を占めた構成意味素は異なるが、上位を占める構成意味素は似通った様相を帯びている。これらは前にも述べたように、人間の最も基本的かつ本能的な感覚である五感を感知する部位であり、このように人間生活に最も密な部位が言語生活にそのまま反映されているということを表わしてくれるものである。

## Ⅶ. 身体部位によることわざの言外意味素

以上のように両国のことわざの身体部位を表わす構成意味素は、本来の各々の意味素の意味とは異なる新たな一つの意味単位として言外意味素を生成するが、この言外意味素はことわざを的確に解釈して、裏に潜む意味を把握することによって抽出することが出来る。この言外意味素の頻度を確認するということは、両国民族の言語生活上の関心分野がわかることにもなる。

### 1. 韓国のことわざの言外意味素

韓国のことわざの中から身体部位を構成意味素とすることわざ590余個の意味を把握して、その言外意味素を意味分野別に抽出してみた結果、約110余項目に分けることができた。<sup>(10)</sup>そのうち、頻出度が5回以上の言外意味素を頻出度順にまとめて見る。

(8) 日本のことわざの場合、身体部位が構成意味素となっているもの870余個の中、身体部位を表わす構成意味素が二つ以上含まれていることわざの数は100余個にも達した。

(9) 構成意味素は分製仕方によってはもっと細かく分けることもあり得るが、本稿では同類のものではできるだけ一まとめにすることにした。

(10) ことわざを解釈するに当たって、人によって多少の相違はありうるが、できるだけ的確な意味の把握、分析につとめた。

〈表3〉 韓國の身体部位から成ることわざの言外意味素の種類と頻出度

順 序	言外意味素	頻 度	ことわざの例
1	無益	25	등이 더우랴, 배가 부르랴
2	氣持	21	등에 풀 바른것 같다
3	食事	20	수염이 적자라도 먹어야 산다
4	容貌	20	머리 큰 양반, 발 큰 도둑
5	有益	18	배 먹고 이 닦기
6	徒勞	18	남의 발에 버선 신긴다
7	しくじり	18	입에 둔 혀도 깨문다
8	禍	18	채인 발에 지 채인다
9	憤怒	15	열이 상투 끝까지 올랐다
10	世情	14	눈 감으면 코 베어 간다
11	身の程	13	제 얼굴 더러운 줄 모르고 거울만 나무란다
12	虛勢	13	다리 부리진 장수 성 안에서 호령한다
13	言行	11	입이 도끼날 같다
14	矛盾	11	배보다 배꼽이 더 크다
15	性急	11	한가람이에 두다리 넣는다
16	努力	10	짙는 방아도 손이 드나들어야 한다
17	度胸	10	쓸개 자루가 크다
18	難易	10	눈 익고 손 설다
19	詭計	10	눈 가리고 아웅한다
20	表裏不同	9	등 치고 간 번다
21	協同	9	외손뼉이 못 울고 한다리로 가지 못한다
22	不可能	9	중이 제 머리 못 깎는다
23	教訓	8	입에 쓴 약이 병에는 좋다
24	生活	8	산 사람 입에 거미줄 칠까
25	利己	8	내 발등의 불을 꺼야 아비 발등의 불 본다
26	行動	8	허리춤에서 뱀 집어던지듯
27	無知	8	눈은 있어도 망울이 없다
28	謹慎	7	발 없는 말이 천리 간다
29	嗜好	7	제 눈에 안경
30	警告	7	이 위에 이가 있다
31	背德	7	빛 주고 뺨 맞는다
32	秩序	6	이마에 부은 물이 발뼉꿈치로 흐른다
33	実利	6	손에 붙은 밥풀 아니먹을까
34	誇張	6	이마뺨이 벗어지도록 덥다
35	信賴	6	남의 말 다 들으면 목에 칼 베텐 날 없다
36	吝嗇	6	머리카락에 흠 파겠다
37	批難	6	뒤에서 손가락질 한다
38	意地惡	5	심심하면 죄수 불기 때리기
39	嫌氣	5	혀에 굳은 살이 박히도록
40	影響	5	입술이 없으면 이가 시리다
41	狀況	5	코를 잡아도 모르겠다
42	仕返し	5	눈에는 눈 이에는 이

ことわざの解釈は、人によって多少の違いがあり得るが、身体部位を構成意味素としている韓國のことわざ



のうち、頻出度が5回以上の言外意味素は大体、42個ぐらいになった。

上の表から考えられるのは、身体部位を構成意味素として表現した言語表現から見て、韓国人の最も大きな関心事は「無益、気分、食事、容貌、有益、徒勞、しくじり…」などの順であることが分かる。

2. 日本のことわざの言外意味素

日本のことわざの中から身体部位を構成意味素とすることわざ870余個の意味を把握して、その言外意味素を意味分野別に抽出してみた結果、約130余項目に分けることができた。そのうち、頻出度が5回以上の言外意味素を頻出度順にまとめてみる。

〈表4〉 日本の身体部位から成ることわざの言外意味素の種類と頻出度

順 序	言外意味素	頻 度	ことわざの例
1	謹慎	34	壁に耳
2	容貌	25	下種(げしゅ)の足太
3	世情	25	下女(げにょ)腹(はら)よければ主腹(しゅはら)知らず
4	行動	24	脛(すね)が流(なが)れる
5	教訓	19	人のことより足下(あしもと)の豆(まめ)を拾(ひろ)え
6	欲心	19	親(おや)の背(せ)でもただ(ただ)は掻(か)かぬ
7	不可能	17	切(き)匙(し)で腹(はら)を切(き)る
8	食事	16	腹(はら)がへ(へ)っては軍(いくさ)はできぬ
9	欠点	16	足(あし)に疵(きず)持(も)つ
10	しくじり	16	足下(あしもと)の鳥(とり)は逃(に)げる
11	禍	16	病(びょう)み足(あし)に腫(は)れ足(あし)
12	言行	14	尻(しり)も結(むす)ばぬ太平(たいへい)楽(らく)
13	愛	14	あば(あ)たもえ(く)ぼ
14	気分	14	奥(おく)歯(は)に物(もの)がは(は)さまる
15	状況	13	下(くだ)り坂(さか)に腰(こし)を押(お)す
16	才能	13	絵(え)書(か)き(に)手(て)書(か)き無(な)し
17	無視	12	股(こ)掌(て)の上(うへ)にもてあ(あ)そぶ
18	徒勞	12	尻(しり)に目(め)業(ごう)
19	因果(いんぐわ)忘(わ)報(ほう)	11	食(た)わぬ飯(い)が髭(ひげ)に付(つ)く
20	無知	11	頭(かぶ)隠(かく)して尻(しり)隠(かく)さず
21	虚勢	11	片(かた)輪(りん)者(しや)の肩(かた)突(つ)張(はり)
22	健康	10	手(て)痛(いた)は肥(こ)えて足(あし)痛(いた)は瘦(すく)せる
23	比較	10	膝(ひざ)枕(まくら)に頬(ほ)杖(じょう)
24	影響	10	頭(かぶ)が動(うご)けば足(あし)も動(うご)く
25	生活	10	都(みやこ)は目(め)恥(か)し、田(い)舎(や)は口(くち)恥(か)し
26	詭計	10	人(ひと)の目(め)を抜(ぬ)く
27	表裏(ひょうり)不(ふ)同(どう)	9	頭(かぶ)を剃(か)りても心(こころ)を剃(か)らず
28	破廉恥	9	面(おもて)の皮(かわ)の千(ち)枚(まい)張(はり)
29	恐怖	9	足(あし)を重(おも)ねて立(た)ち目(め)を仄(ひ)てて視(み)る
30	努力	8	頭(かぶ)を懸(か)げ股(こ)を刺(さ)す
31	消費	8	ある手(て)からこぼ(こぼ)れる
32	言辯	8	三(さん)寸(すん)の舌(した)を掉(お)う
33	注意	7	お尻(しり)の用心(よこしま)
34	矛盾	7	親(おや)の脛(すね)か(か)じる息(い)子(こ)の歯(は)の白(しろ)さ
35	無益	7	金(かね)の無(な)い男(おとこ)と頭(かぶ)の無(な)い女(め)

順序	言外意味素	頻度	ことわざの例
35	幸運	7	開いた口へ牡丹餅
37	忍耐	6	肩を張るは易く腹を据えるは難し
38	隠蔽	6	尻が割れる
39	有益	6	犬の手も人の手にしたい
40	信頼	6	女のかたいは膝頭ばかり
41	天性	6	下弱は口さがないもの
42	自我	6	我が手で首しめる
43	弁明	5	舌に塵も付けぬ
44	世論	5	民の口を防ぐは水を防ぐより甚し
45	秩序	5	手足の頭目をふせぐが如し
46	実利	5	背に腹は代えられぬ
47	難易	5	産する時は額で小豆が三粒煮える
48	警告	5	尻馬に乗れば落ちる
49	障害	5	尻の下の疾
50	批難	5	後指を指される
51	成長	5	三十の尻括り
52	貧乏	5	無いと寒いには手が出ない
53	風習	5	初見に白歯見せるな

以上のように、身体部位を構成意味素としている日本のことわざのうち、頻出度が5回以上の言外意味素は大體、53個ぐらいになった。

ここで考えられるのは、日本人が身体部位を構成意味素として表現した言語表現において、彼らの最も大きな関心事は、「謹慎、容貌、世情、行動、教訓、欲心、不可能、食事」の順であると言えそうである。

### 3. 両国のことわざの言外意味素の比較

上の表3、表4を中心として、韓日両国の身体部位を構成意味素にもつことわざの言外意味素と比べてみたが、言外意味素の総数は韓国が110余り、日本が130余りであった。このうち、5回以上の頻出度をもつ言外意味素は韓国が42個、日本が53個であり<sup>(11)</sup>これを種類別に、韓国のことわざを基準にして42位まで比べてみたら、いくつかのものを除いては、ほぼ同様の言外意味素から成っていることがわかる。したがって、両国の言外意味素の総数の差は、身体部位によることわざ総数の差によるものであり、現に、身体部位による各ことわざが表す言外意味素の分布は、頻出度の差はあるものの、意味の上ではさほど変わりのない内容であることがわかる。

また、これら言外意味素を頻出度の面から比べてみたら、韓国は「無益、気分、食事、容貌、有益、徒勞、しくじり、視…」などの順になっており、そのうち、「無益」がトップを占めている。いっぽう日本の方は、「謹慎、容貌、世情、行動、教訓、欲心、不可能、食事…」の順になっており謹慎が一番多いということがわかる。以上のことから考えて身体部位を構成意味素とすることわざを用いて表現する内容は、韓国人の場合は日常生活における利害関係を重視したものであり、日本人の場合は日常生活における言動を慎しむことであった。

## V. 両国のことわざの構成意味素と言外意味素の比較

これまで述べて来た韓日両国の身体部位から成ることわざの構成意味素と、そのことわざの意味する言外意味素をもとにして、今から身体部位から成る両国のことわざの構成意味素と言外意味素を対比・比較して見る。

まず、同一の身体部位を構成意味素としている両国のことわざのもつ言外意味素の種類の比較結果は、次の

(11) 両国のことわざの比較・対照において、分析表には頻度数の少ない言外意味素に除き、5回以上のものだけを載せた。

表5のようである。表5の構成意味素はいずれも両国共通のものであり、頻出度が10回以上のものから選んだものである。

〈表5〉 同じ構成意味素によることわざの言外意味素比較表<sup>(12)</sup>

構成意味素	頻 出 度		言 外 意 味 素	
	韓 国	日 本	韓 国	日 本
目	72	85	詭計・徒勞	容貌・愛
口	47	82	禍・虚勢	謹慎・言行
鼻	44	33	禍・世情	容貌・教訓
足	37	53	禍・背徳	不安・行動
手	31	137	協同・才能	才能・しくじり
耳	31	41	有益・教訓	謹慎・言行
腹	29	50	度胸・食事	食事・不可能
歯	23	16	しくじり・影響	言行・行動
頭	23	26	無益・容貌	行動・無益
顔	19	27	容貌・しくじり	容貌・禍
身体内部	17	13	表裏不同・諂い	努力・度胸
背	15	11	表裏不同・無益	欲心・不可能
首	12	16	生活・食事	秩序・矛盾
毛	11	15	食事・性急	容貌・不可能
舌	11	16	謹慎・言行	謹慎・言行

以上のように、同じ身体部位を用いた両国のことわざの意味する言外意味素は、一致するものも、相異なるものもあった。これは、同じ身体部位によることわざと言っても、その意味は国によって違うこともあり得ることを示している。勿論、同一の身体部位を表わす構成意味素を持つことわざを全部、比較したわけではないので断言し難い点も無くはない。しかし、ここで比較したことわざは10回以上の頻出度をもつものを対象としたので、だいたいにおいては全体の意味が表われていると言えるだろう。

いっぽう、同一の言外意味素を表わす身体部位表現の入っている両国のことわざの構成意味素を比較してみると、次の表6のようになる。

〈表6〉 同じ言外意味素を表わすことわざの構成意味素比較表

言外意味素	頻 出 度		構 成 意 味 素	
	韓 国	日 本	韓 国	日 本
気分	21	14	目・背・鼻	手・腹・耳
食事	20	16	腹・首・口	腹・口・手
容貌	20	25	顔・足・頭	目・鼻・足
徒勞	18	12	足・手・目	腹・耳・尻
しくじり	18	16	足・顔・頬	手・足・身
禍	18	16	鼻・足・眉	身・目・足
世情	14	25	目・鼻・腕	口・腹・手
虚勢	13	11	足・手・腹	口・腹・歯
言行	11	14	口・舌・唇	口・耳・舌
詭計	10	10	目・口・舌	手・目・口

(12) この図表には、同じ意味素をもつことわざの意味する言外意味素の中から頻出度の高い代表的なものだけを載せた。

表6に出てくる言外意味素は、構成意味素の場合と同じく、いずれも両国ことわざ共通のものであり、10回以上の頻出度をもつものから抜粋したものである。

上の表6によって、同じ構成意味素に対する言外意味素比較の場合と同じく、同一言外意味素を表わすことわざに用いられた身体部位の構成意味素もいろいろな形となることがわかる。したがって、同じ言外意味素を表わすことわざであっても、その構成意味素が相違することから考えてみた時、韓日両国民族の言語生活において身体部位に関係のある語素嗜好度がうかがえる。

また、両国のことわざの中には、同一身体部位を構成意味素としながら、かつ同じ言外意味素を表わす場合がかなりある。例えば、

- 입술이 없으면 이가 시리다.
- 唇滅びて齒寒し<sup>(13)</sup>

のようなことわざがある。この韓日両国のことわざを比較すると、いずれも同じ身体部位の「唇(입술)」と「齒(이)」を構成意味素としており、「影響」という同一言外意味素を持っている。

このように、同じ身体部位を構成意味素として同一言外意味素を表わすことわざは、中国の故事成語から由来したものが大半である。これは、漢文化圏の中の韓日両国と中国との深い関わり合いを見せてくれる好例である。

## Ⅶ. おわりに

上述のように、本稿では身体部位によって表現された韓日両国のことわざの意味素を構成意味素と言外意味素に分けて比較・分析・考察し、両国民族の言語意識を究明してみた。結論としてこれまでの内容をまとめてみると次のようである。

1. 韓日両国のことわざ全体の中で身体部位を構成意味素としているものの占める比率は、韓国の方が少しばかり高く、身体部位を表わす構成意味素の種類は、韓日両国がほぼ変わらない。
2. 韓日両国のことわざの構成意味素の頻出度を比べてみた結果、上位を占める構成意味素の種類は、両国ともあまり変わらない。これは、両国とも人間の生活に最も関係の深い構成意味素を用いていることを表わす。
3. 身体部位を構成意味素とすることわざの言外意味素は、種類は日本の方が少し多いが、その意味においてはいくつかの種類を除いてはほぼ同じ内容から成っている。
4. 言外意味素の頻出度の比較によって、身体部位を構成意味素としていることわざでもって表現しようとした言語生活上の韓国人の関心事は、日常生活における利害関係であり、日本人の場合は、日常生活において言動を慎しむことであった。
5. 韓日両国の身体部位を構成要素としていることわざの中には、中国の故事から由来したものが多く、両国の長年の中国文化との連帯関係がうかがわれる。

## 参 考 文 献

- 김도환, 韓國俗談의 心理的 分析研究, 釜山大師範論文集 2, 1957.  
 金思燁外, 俗談論, 大建出版社, 1953.  
 金宗澤, 俗談의 意味機能에 関한 研究, 국어국문학 34, 35, 1981.  
 金志孝, 韓國俗談의 意味素研究, 群山大學論文集, 第五集, 1983.  
 朴甲洙, 言語에 關한 俗談攷, 異河潤先生華甲紀念論文集, 1966.

(13) 出典は「史記」の「虞之與虢，唇之與齒，唇亡則齒寒」から。

- 송재선編, 우리말俗談큰사전, 瑞文堂, 1983.
- 李基文, 俗談辭典, 一潮閣, 1982.
- 李庸周, 俗談의 感化性, 서울大師大學報 4, 1959.
- 李充燮, 韓國俗談의 感化性에 關한 考察, 釜山教育大學研究報告 5, 1969.
- 李乙煥, 言語에 관한 俗談考, 淑大, 靑坡文學 8, 1968.
- 李乙煥, 韓國俗談의 文法構造研究, 亞細亞女性問題研究所 10, 1971.
- 池上嘉彦, 意味論, 大修館書店, 1980.
- 大出冕, 日本語と論理, 講談社, 1983.
- 加藤常賢外, 中國故事名言辭典, 角川書店, 1982.
- 金田一春彦, 日本人の言語表現, 講談社, 1983.
- 鈴木業三外, 故事ことわざ辭典, 東京堂出版, 1979.
- 長谷川潔, 日本語と英語, サイマル出版会, 1974.